

日本語を母語とする中国語学習者における中国語の自動詞表現・他動詞表現・受身表現の選択について —動作主の不注意による対象の変化を表す場合—

杉村 泰

1. はじめに

本研究は日本語を母語とする中国語学習者における中国語の自動詞表現・他動詞表現・受身表現の選択意識について論じたものである。杉村(2014)では“电池没电了, 所以表停了(電池が切れて時計が止まった)”、“因为风很大, 烛火灭了(風が強くて蠟燭の火が消えた)”など自然作用による結果を表す「非人為的事態」の場合について分析し、杉村(2015)では“在这座城市铁路通了(この町には鉄道が通っている)”、“门砰的一声开了后, 进了房间(ドアをバタンと開けて部屋の中に入った)”など人間の作用による結果を表す「人為的事態」の場合について分析した。本稿では、「人為的事態」のうち杉村(2015)では扱わなかった「動作主の不注意による対象の変化を表す場合」について分析する。

分析に際しては、日本語母語話者(以下「日本人」と呼ぶ)の日本語、日本語を母語とする中級中国語学習者(以下「日本人中国語学習者」と呼ぶ)の中国語、中国語母語話者(以下「中国人」と呼ぶ)の中国語についてそれぞれ自・他・受身の選択テストを行い、母語(日本語)と中間言語(日本人の中国語)と目標言語(中国語)の違いを比較する。

2. 先行研究

先行研究に関しては杉村(2013b, 2014)で論じたので、本稿では割愛する。

3. 調査の概要

本研究ではアンケートによる自動詞表現・他動詞表現・受身表現の選択テストを利用して分析を行う。本研究は杉村(2013a,b,c)を受けた日本語ベースの研究であるため、まず日本語のアンケートを作成し、次にそれを中国語に翻訳した。中国語の場合、自他の判別が明確でない場合もあるが、便宜上対象物が主語となるものを自動詞表現、対象物が目的語となるものを他動詞表現、“被”構文を受身表現とした。

日本語のアンケートは次の図Aに示す 12 の事態にそって合計 60 問作成した。

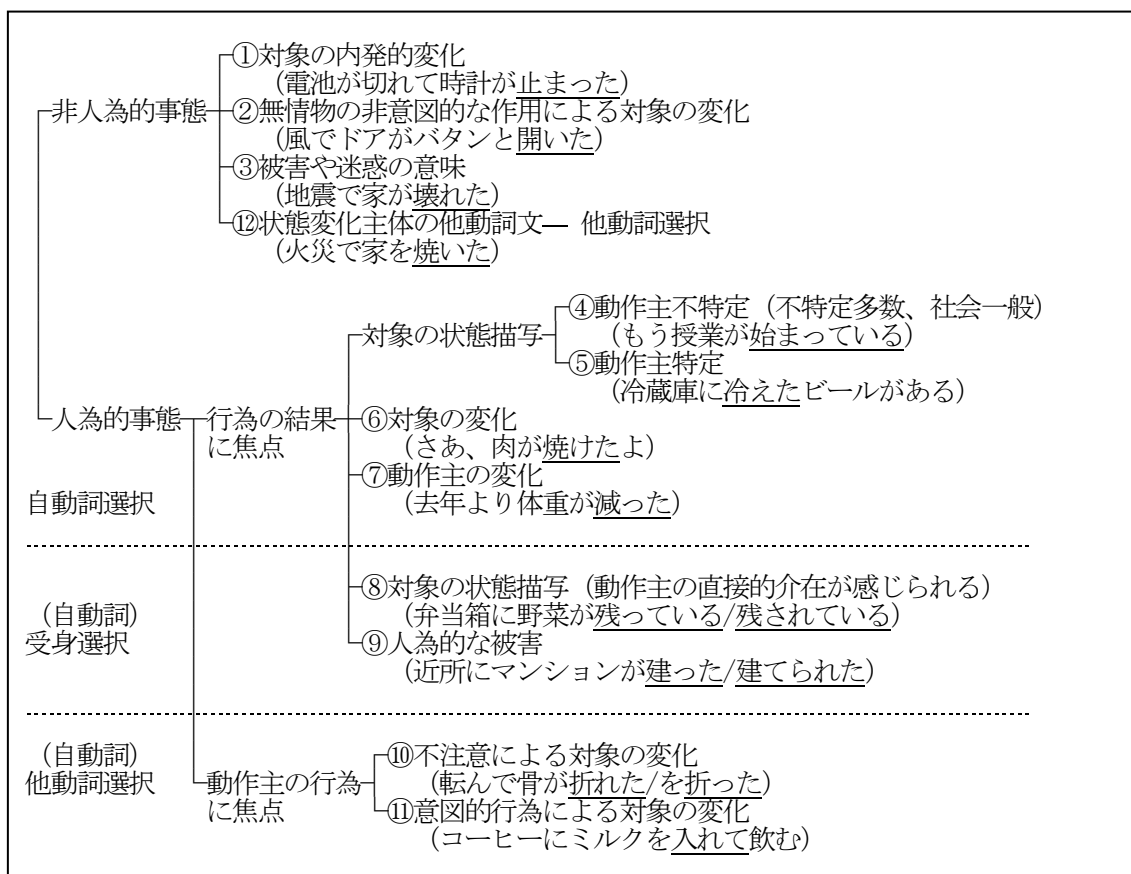


図 A 本稿における事態の分類と母語話者の選択傾向

各問題は例(1)のように被験者に格助詞「が/を」と「自動詞/他動詞/受身」の組み合わせのうち最も適当だと思うものを一つ選択させるという形式である。次にこの日本語のアンケートを中国語に翻訳し、例(2)のような中国語のアンケートを作成した。この場合も、被験者には①～③の中から最も適当だと思うものを一つ選択させた。

- (1) 転んで骨(が/を)(折れて/折って/折られて)しまった。
- (2) ①因摔跤骨折了。(自動詞表現)¹
 - ②因摔跤折断了骨头。(他動詞表現)
 - ③因摔跤骨头被折断了。(受身表現)

本研究の被験者と調査の時期・場所は次のとおりである。

- ・日本語母語話者(日本語アンケート)
名古屋大学学部生 114 人(2012 年 5 月 8～10 日に名古屋大学にて実施)
- ・日本語を母語とする中級前期の中国語学習者(中国語アンケート)
名古屋大学で第2外国語として中国語を学ぶ学部生(一通り初級文法を終えた段階)
(2013 年 5 月 14 日、2014 年 4 月 22 日に名古屋大学にて実施)(合計 41 人)
- ・中国語母語話者(中国語アンケート)
北京第二外国語大学日語学院学部生 32 人(2013 年 4 月 12 日に北京第二外国語大学
にて実施)、華東師範大学外国語学院日語系学部生 35 人(2013 年 5 月 27 日に華東師
範大学にて実施)(合計 67 人)

以上のアンケート調査をもとに日中各項目の自動詞表現・他動詞表現・受身表現および「ねじれ」(日本語アンケートで「を+自動詞」または「が+他動詞」となっているもの)の選択率を集計した。このうち、本稿では図Aの事態⑩に属す7つの表現を取り上げて分析する。この7つの表現の自・他・受身の選択率をまとめると表1のようになる。なお、本稿では日本語の「が受身」と「を受身」の区別については立ち入って議論しないため、両者を合わせて「受身」とする。同様に、格助詞と自他動詞のねじれについても議論の対象としないため合わせて「ねじれ」とする。また、表中の「中国人・中」は中国人の中国語、「日本人・中」は日本人中国語学習者の中国語、「日本人・日」は日本人の日本語を指す。それから選択率は小数点以下第二位を四捨五入して示してあるため、自動詞表現・他動詞表現・受身表現・ねじれの合計がぴったり100%にならないものもある。

¹ 実際のアンケート用紙には「(自動詞表現)」、「(他動詞表現)」、「(受身表現)」という記載はしていない。

表1 自動詞・他動詞・受身・ねじれの選択率(%)

	被験者	自動詞	他動詞	受身	ねじれ
事態⑩(不注意による対象の変化)	1. 英語の単位(“学分”(が/を)(落ちて/落として/落とされて)留年した。 ①英語学分降低而留级了。 ②降低英语学分而留级了。 ③英语学分被降低而留级了。				
	中国人・中	74.6	1.5	23.9	---
	日本人・中	70.7	19.5	9.8	---
	日本人・日	0.9	95.6	3.5	0.0
	2. 不注意でポケットから財布(が/を)(落ちて/落として/落とされて)しまった。 ①由于不小心, 钱包从口袋里掉了。 ②从口袋里不小心把钱包弄掉了。 ③钱包不小心从口袋里被弄掉了。				
	中国人・中	77.6	14.9	7.5	---
	日本人・中	68.3	19.5	12.2	---
	日本人・日	37.7	59.6	2.6	0.0
	3. 転んで骨(が/を)(折れて/折って/折られて)しまった。 ①因摔跤骨折了。 ②因摔跤折断了骨头。 ③因摔跤骨头被折断了。				
	中国人・中	77.6	22.4	0.0	---
	日本人・中	80.5	17.1	2.4	---
	日本人・日	17.5	80.7	1.8	0.0
	4. 遊んでいる時、不注意で梅の枝(が/を)(折れて/折って/折られて)しまった。 ①玩的时候, 由于不小心, 梅花树枝断了。 ②玩的时候, 不小心把梅花树枝折断了。 ③玩的时候, 梅花树枝被(我)不小心折断了。				
	中国人・中	1.5	95.5	3.0	---
	日本人・中	51.2	24.4	24.4	---
	日本人・日	16.7	80.7	2.6	0.0
	5. 不注意で皿(が/を)(割れて/割って/割られて)しまった。 ①不小心碟子打碎了。 ②不小心把碟子打碎了。 ③不小心碟子被打碎了。				
	中国人・中	3.0	97.0	0.0	---
	日本人・中	53.7	39.0	7.3	---
	日本人・日	22.8	77.2	0.0	0.0

6. カレーを食べた時に、シャツ(が/を)(汚れて/汚して/汚されて)しまった。 ①吃咖喱的时候, 衬衣脏了。 ②吃咖喱的时候, 弄脏了衬衣。 ③吃咖喱的时候, 衬衣被弄脏了。				
中国人・中	1.5	82.1	16.4	---
日本人・中	46.3	31.7	22.0	---
日本人・日	37.7	61.4	0.0	0.9
7. 飲みすぎて胃(が/を)(壊れて/壊して/壊されて)しまった。 ①由于饮酒过量, 胃喝坏了。 ②由于饮酒过量, 把胃喝坏了。 ③由于饮酒过量, 胃被喝坏了。				
中国人・中	13.4	82.1	4.5	---
日本人・中	70.7	7.3	22.0	---
日本人・日	35.1	64.9	0.0	0.0

4. 動作主の不注意による対象の変化を表す場合(事態⑩)

動作主の不注意による対象の変化を表す場合とは、動作主がすべき行為を怠ったために対象に不本意な結果が生じる場合のことである。たとえば、「転んで骨を折った」は動作主が意図的に骨を折ろうとしたわけではなく、過失で不本意に骨を折ったことを表す。本稿ではこのような事態の場合について論じる。

杉村(2013d)で指摘したように、動作主の不注意による対象の変化を表す場合、日本語では動作主を主語にした他動詞文が選択されやすい。この場合、動作主は当該事態を実現させた責任者(裏を返せばすべき注意の不履行者)として描かれる。これに対し、中国語では図4～図6の「枝の切断」、「皿の破壊」、「シャツの汚染」のように動作主から対象への(意図性はなくとも)働きかけが強い場合には他動詞文が選択されやすく、図1～図3の「単位の不取得」、「財布の落下」、「自己の骨折」のように動作主から対象への働きかけとはいにくい場合には自動詞文が選択されやすいという違いがある。以下、これと比較しながら、図1～図7の順に日本人中国語学習者の特徴について見ていく。²

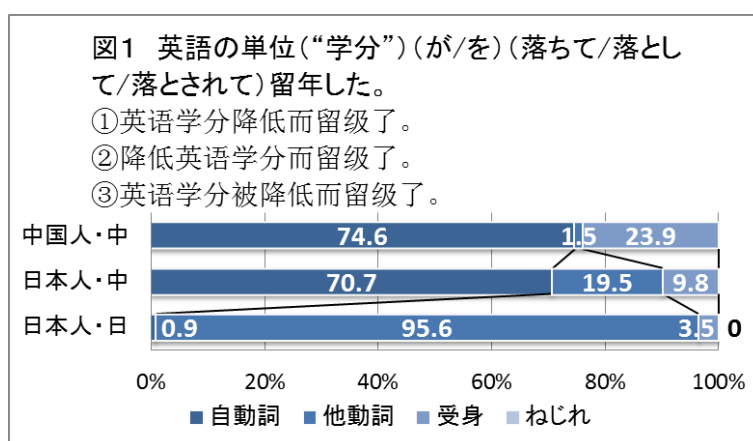
まず、図1は、動作主の勉強不足による「単位の不取得」を表す場面である。この場合、日本語では他動詞表現の選択率が95.6%と高いのに対し、中国語では自動詞表現の選択率が74.6%と高く、次いで受身表現が23.9%となっている。日本語では自動詞表現を用いる

² 以下、単に「中国語」と言えば中国人の中国語を指し、日本人の中国語は「日本人の中国語」と言うことにする。

と単に動作主が背景化されて、動作主の責任が回避された意味になるのに対し、他動詞表現を用いると動作主がクローズアップされて、動作主の過失や不注意を含んだ意味になる。それゆえ、「英語の単位が落ちた」(自動詞表現)と言うとまるで本人には責任がないように感じられるため、特に文脈がない限り、本人の責任を含意した「英語の単位を落とした」(他動詞表現)と言った方が自然なのである。

一方、中国語では日本語の「(単位が)落ちる/(単位を)落とす」を直訳して“掉”とは言わないため、“下降”(下がる/下げる)を使って比較した。この場合、中国語で他動詞表現を用いると対象に対して能動的に働きかけを行ったという意味が強くなる。しかし、“学分”(単位)は動作主が能動的に働きかけられるような対象ではないため、情景描写的に捉えて自動詞表現を用いるか、学校側に落とされた(下げられた)と捉えて受身表現を用いる。

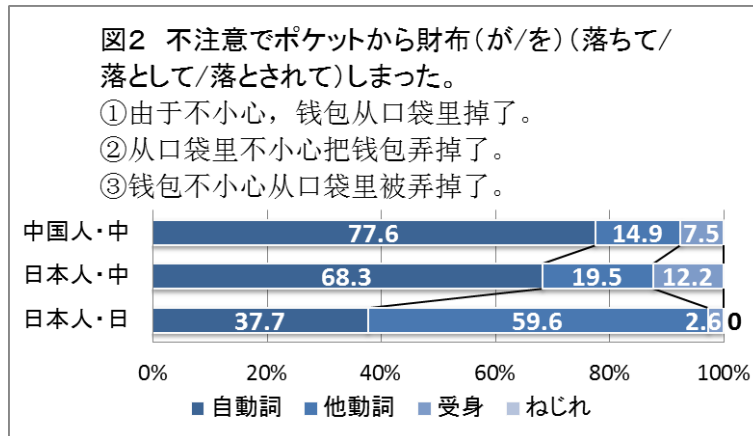
ここで日本人の中国語を見ると、自動詞表現の選択率が 70.7%と高く、次いで他動詞表現が 19.5%となっている。このことから、日本人中国語学習者も中国人なみに自動詞表現を選択する人が多いことが分かる。



次の図2は、動作主の不注意による「財布の落下」を表す場面である。この場合、日本語では自動詞表現が 37.7%、他動詞表現が 59.6%となっている。図1に比べて自動詞表現の選択率が高いのは、「単位の不取得」がほとんど人為的な要因によるものであるのに対し、「財布の落下」は自然現象とも解釈されるためである。話し手が自然現象の側面に焦点を当てた場合には自動詞表現が選択され、動作主の不注意に焦点を当てた場合には他動詞表現が選択されると考えられる。

一方、中国語では自動詞表現の選択率が 77.6%と高く、次いで他動詞表現が 14.9%となっている。このことから、中国語では無意志の「財布の落下」は自然現象と認知されやすいことが分かる。

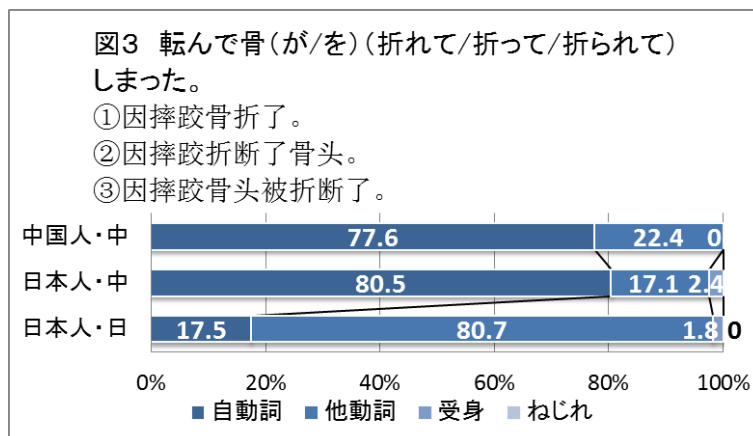
ここで日本人の中国語を見ると、自動詞表現の選択率が 68.3%と高く、次いで他動詞表現が 19.5%となっている。このことから、日本人中国語学習者は中国人と同じような感覚で自・他・受身を選択していることが分かる。



次の図3は、動作主の不注意による「自己の骨折」を表す場面である。この場合、日本語では自動詞表現が 17.5%、他動詞表現が 80.7%と他動詞表現の選択率が高くなっている。これは「自己の骨折」は自然現象とは捉えにくく、動作主の過失による「行為」として認知されるためである。

一方、中国語では自動詞表現の選択率が 77.6%と高く、次いで他動詞表現が 22.4%となっている。このことから、中国語では無意志の状況での「自己の骨折」は自然現象と認知されやすいことが分かる。

ここで日本人の中国語を見ると、自動詞表現の選択率が 80.5%と高く、次いで他動詞表現が 17.1%となっている。このことから、日本人中国語学習者は中国人と同じような感覚で自・他・受身を選択していることが分かる。

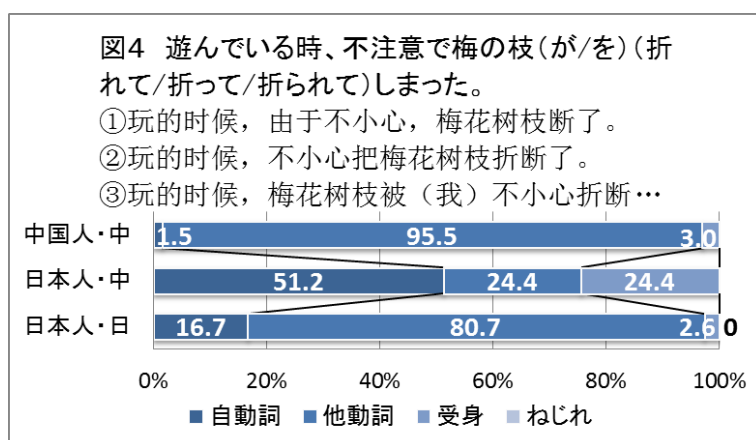


以上、図1～図3のように動作主から対象への働きかけ性が低い場合は、日本人の中国語と中国人の中国語は似たような選択傾向を見せる。しかし、同じ動作主の不注意による対象の変化を表す場合でも、図4～図6のように動作主から対象への働きかけ性が高い場合は、日本人の中国語と中国人の中国語は異なる選択傾向を見せる。

まず、図4は、動作主の不注意による「枝の切断」を表す場面である。先の「自己の骨折」が動作主自身の身体に影響の及ぶ再帰的な表現であるのに対し、「枝の切断」は動作主以外の第三者に影響が及ぶ表現である点で違いがある。この場合も日本語では自動詞表現が 16.7%、他動詞表現が 80.7%となり、他動詞表現の選択率が高くなっている。このことから、日本語では対象が動作主自身の身体の一部であろうと第三者であろうと、動作主の不注意による対象の変化を表す場合は、動作主に焦点が当たって他動詞が選択されやすいことが分かる。

一方、中国語では先の「自己の骨折」とは逆に、自動詞表現の選択率は 1.5%しかなく、他動詞表現の選択率が 99.5%と高くなっている。このことから、中国語では対象が動作主自身の身体の一部なのか第三者なのかで自他の選択を変え、再帰的な場合は自動詞表現を選択し、第三者への影響を表す場合は他動詞表現を選択するという違いのあることが分かる。

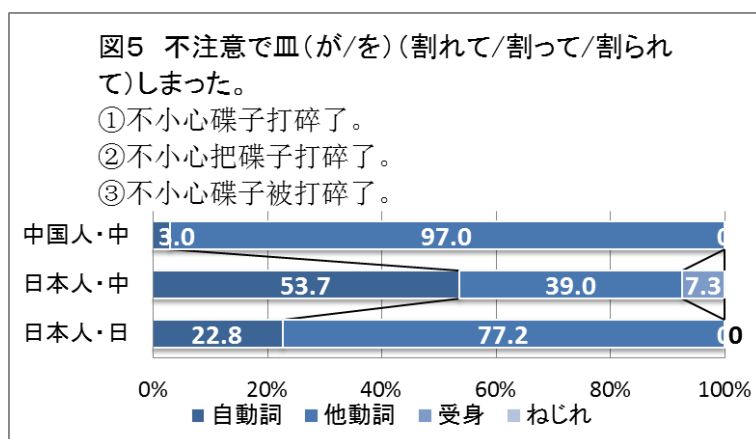
ここで日本人の中国語を見ると、自動詞表現の選択率が 51.2%とほぼ半数を占め、残りは他動詞表現が 24.4%、受身表現が 24.4%となっている。これは母語である日本語とも目標言語である中国語とも異なる選択傾向である。このことから、第三者への影響を表す場合、日本人中国語学習者も他動詞の選択率が少し高くなるものの、中国人のようにはいかないことが分かる。



次の図5は、動作主の不注意による「皿の破壊」を表す場面である。これも動作主以外の第三者に影響が及ぶ表現である。この場合も日本語では自動詞表現が 22.8%、他動詞表現が 77.2%となり、他動詞表現の選択率が高くなっている。

一方、中国語でも自動詞表現の選択率は 3.0%しかなく、他動詞表現の選択率が 97.0%と高くなっている。このように中国語では第三者への影響を表す場合は、日本語と同様に他動詞表現を選択する。

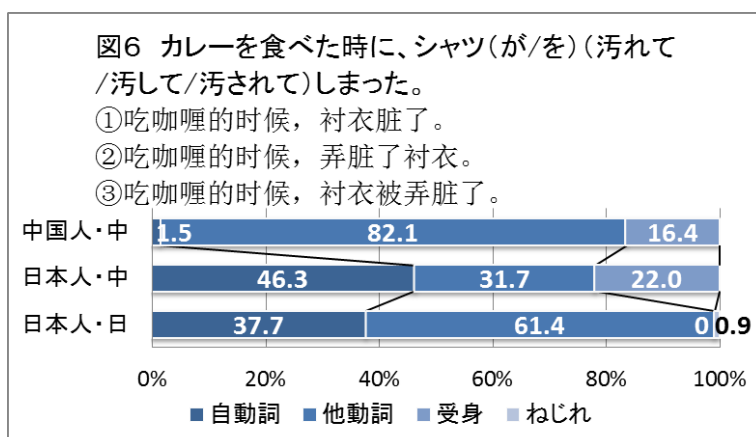
ここで日本人の中国語を見ると、自動詞表現の選択率が 53.7%とほぼ半数を占め、残りは他動詞表現が 39.0%、受身表現が 7.3%となり、母語である日本語とも目標言語である中国とも異なる選択傾向となっている。このことから、第三者への影響を表す場合、日本人中国語学習者も他動詞の選択率が少し高くなるものの、中国人のようにはいかないことが分かる。



次の図6は、動作主の不注意による「シャツの汚染」を表す場面である。これも動作主以外の第三者に影響が及ぶ表現である。この場合、日本語では自動詞表現が 37.7%、他動詞表現が 61.4%となっている。図4や図5に比べて自動詞表現の選択率が高いのは、シャツの汚染という情景描写にも視点が行きやすいためである。

一方、中国語では自動詞表現の選択率は 1.5%しかなく、他動詞表現の選択率が 82.1%と高くなっている。このように先の図4や図5と同様に、第三者への影響を表す場合は他動詞表現が選択されやすい。

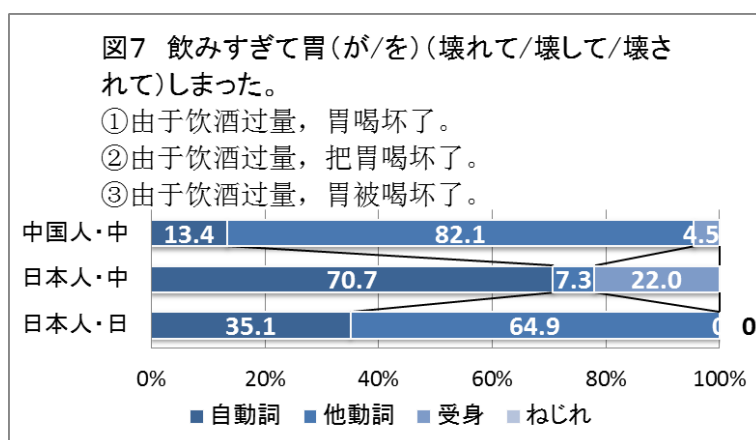
ここで日本人の中国語を見ると、自動詞表現の選択率が 46.3%とほぼ半数を占め、残りは他動詞表現が 31.7%、受身表現が 22.0%となっている。この場合も日本人の中国語は先の図4や図5と似た選択傾向を示している。



最後に図7について見る。図7は、動作主の不注意による「胃の故障」を表す場面である。これは動作主自身の身体に影響が及ぶ再帰表現である。この場合、日本語では自動詞表現が 35.1%、他動詞表現が 64.9%となっている。自動詞表現の「胃が壊れる」を用いると胃の機能の故障に焦点を当てた情景描写的な表現となり、他動詞表現の「胃を壊す」を用いると動作主の不注意に焦点を当てた表現となる。

一方、中国語では自動詞表現の選択率は 13.4%しかなく、他動詞表現の選択率が 82.1%と高くなっている。この場合、対象である「胃」は動作主自身の身体であるが、図3の「自己の骨折」の場合とは違い自動詞表現の選択率は高くない。このことから、中国語では飲酒による「胃の故障」は動作主による胃への働きかけと認知されることが分かる。

ここで日本人の中国語を見ると、自動詞表現の選択率が 70.7%、他動詞表現が 7.3%、受身表現が 22.0%となり、先の図1～図3のように自動詞表現の選択率が高くなっている。このことから、日本人中国語学習者は対象が第三者の場合は自動詞表現が5割程度になり、再帰的な場合には自動詞表現が7割程度以上になることが分かる。



5. まとめ

以上、本稿では日本語を母語とする中級中国語学習者における中国語の自動詞表現・他動詞表現・受身表現の選択のうち、動作主の不注意による対象の変化を表す場合について考察した。その結果、次のことを明らかにした。

- ①図1～図3の「単位の不取得」、「財布の落下」、「自己の骨折」のように動作主から対象への働きかけ性が低い場合は、日本語では他動詞表現の選択率が高くなり、中国語では自動詞表現の選択率が高くなる。ここで、日本人の中国語は中国人の中国語と似たような選択傾向を示す。
- ②図4～図6の「枝の切断」、「皿の破壊」、「シャツの汚染」のように対象が第三者で動作主から対象への働きかけ性が高い場合は、日本語でも中国語でも他動詞表現の選択率が高くなる。ここで、日本人の中国語は自動詞表現の選択率がほぼ半数を占め、残りを他動詞表現と受身表現で分ける結果となっており、母語である日本語とも目標言語である中国とも異なる選択傾向を示す。
- ③図7の「胃の故障」は対象が動作主の身体であるという点で図3の「自己の骨折」と同じ再帰表現となっている。しかし、日本語でも中国語でも他動詞表現の選択率が高くなるという点で「自己の骨折」とは異なる。ここで、日本人の中国語は図1～図3の場合と同様に、自動詞表現の選択率が高くなっている。

以上のことから、日本人の中国語では動作主から対象への働きかけ性の如何に関わらず自動詞表現が最も選択されやすいことを見た。その上で、相対的に働きかけ性が低い場合には自動詞表現の割合が高くなり、相対的に働きかけ性が高い場合には自動詞表現の割合が低くなることを明らかにした。日本人の中国語教育においては、特に上の②と③の場合に中国語母語話者との違いが大きくなるため、注意が必要であると思われる。

付記:本稿は平成 25-27 年度科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究)「日本語学習者の自動詞・他動詞・受身の選択意識と母語転移に関する実証的研究」(研究代表者:杉村泰、課題番号 25580111)による研究成果の一部である。

[参考文献]

- 杉村 泰(2013a)「対照研究から見た日本語教育文法 ―自動詞・他動詞・受身の選択―」
『日本語学』2013 年6月号 第 32 卷第7号(通巻 410 号), 明治書院, pp. 40-48
- 杉村 泰(2013b)「中国語話者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択
について ―人為的事態の場合―」『日本語／日本語教育研究』[4]2013, 日本語／
日本語教育研究会・ココ出版, pp. 21-38
- 杉村 泰(2013c)「中国語話者の日本語使用に見られる有対動詞の自・他・受身の選択 ―
被害や迷惑の意味を表す場合―」『漢日語言対比研究論叢』第4輯, 漢日対比語言学
研究(協作)会編、北京大学出版社, pp. 275-286
- 杉村 泰(2013d)「中国語話者における日本語の有対動詞の自動詞・他動詞・受身の選択
について ―動作主の不注意による対象の変化を表す場合―」『ことばの科学』第 26
号, 名古屋大学言語文化研究会, pp.153-170
- 杉村 泰(2014)「日本語を母語とする中国語学習者における中国語の自動詞表現・他動詞
表現・受身表現の選択について ―非人為的事態の場合―」『名古屋大学言語文化
論集』第 36 卷第 1 号, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科, pp.31-45
- 杉村 泰(2015)「日本語を母語とする中国語学習者における中国語の自動詞表現・他動詞
表現・受身表現の選択について ―人為的事態の場合―」『名古屋大学言語文化論
集』第 36 卷第 2 号, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科, (掲載予定)

ことばの科学

STUDIA LINGUISTICA

第 28 号

2014 年 12 月 2 日 印刷

2014 年 12 月 5 日 発行

編集兼発行者

名古屋大学言語文化研究会

印刷 名古屋大学生協 印刷部

ISSN 1345-6156